釈学 (Buddhist Hermeneutics) である。その背景にはガダマー (Hans-Georg Gadamer) の解釈学がアメリカの哲学界に与えた影 いが、アメリカの仏教研究で近年最も注目されたテーマは仏教解 日本の仏教研究においてはほとんど問題としてとりあげられな

響があり、その余波として仏教研究においても解釈学をとりあげ

たり、仏教学の方法論として解釈学を導入しようとする試みがな

ある。その後、仏教解釈学をテーマにする論文がいくつか発表さ urnal of American Academy of Religion. XLVI/1, 19-39, 1973.) 表したのは Robert A. F. Thurman (Buddhist Hermeneutics. Jo-アメリカにおいて仏教解釈学というタイトルの論文を最初に発

> Asian Buddhism 6, University of Hawaii Press, Honolulu, 1988.) dhist Hermeneutics, edited by Donald S. Lopez, Jr., Studies in East 発表がなされ、学会成果は一書にまとめて刊行されている (Bud-ひらかれている。その学会では、インド仏教、チベット仏教、中 会 (The National Endowment for the Humanities との共催) が the Study of Buddhism and Human Values で仏教解釈学の学 国仏教、日本仏教のそれぞれの分野から解釈学をとりあげた研究 一九八四年六月にロサンゼルスの The Kuroda Institute for

長

崎

法

潤

的解釈についての哲学的原則」と定義し、そのような解釈学は仏 において "Hermeneutics" の意味を「伝統的な聖典に対する合理 Robert A. F. Thurman は、彼の論文 Buddhist Hermeneutics

として知られる教えの中に見られる、と述べている。その四依の教の中にも見いだされる。それは、伝統的に四依(Four Reliance)

教えに見られる解釈学 について、サーマンは、ツォンカパの

Legs bhsad sñin po (善説心髄) をもとにして明らかにしている。ところで四依(catvāri pratisaraṇa)とは、依りどころとしなければならない以下の四つのものである。

(1)教え (dharma) そのものを依りどこ ろと し、教えを説く人(pudgala)に依ってはならない。②教えの意味(artha)にしたがい、文字や語 (vyañjana)に依ってはならない。③真の智慧 (jñāna)に依り、迷いやすい人間の知識 (vjjñāna)に依ってはならない。④真の智慧 (jňāna)になってはならない。④真の智慧 (jňāna)になってはならない。④

教え、である。

は、niddharetvā grahitavyārtham (解釈してから知られる意味)は、nidārtha (了義)とは、する。アビダルマ仏教におわされておらず、解釈が必要な教説である。アビダルマ仏教におわされておらず、解釈が必要な教説である。アビダルマ仏教においては、nītārtha (了義)とは、yathāruṭavaśena jfiātavyārthamいては、nītārtha (了義)とは、yathāruṭavaśena jfiātavyārthamいては、nītārtha (了義)とは、yathāruṭavaśena jfiātavyārthamいては、niddharetvā grahitavyārtham(解釈してから知られる意味)と、niddharetvā grahitavyārtham(解釈してから知られる意味)は、niddharetvā grahitavyārtham(解釈してから知られる意味)は、niddharetvā grahitavyārtham(解釈してから知られる意味)ということである。アビダルマ仏教にある意味)にある意味)は、niddharetvā grahitavyārtham(解釈してから知られる意味)ということである。アビダルマ仏教にある意味)にある。

[Poussin. Abhidharmakośa de Vasubandhu, 1971, V, 246, n. 2] Y+8

る。前者は、ブッダが直接その意味を述べた教えであり、後者は、

る。

ブッダがその意味を暗示している教えである。弟子が完全に述べつくされた教えを受け入れる準備がないので、

は阿含等の小乗の教え、第二は般若経の教え、第三は解深密経のというな空であるという教え、③不空不妙の教え、定めり、第一法はみな空であるという教え、③不空不妙の教え、であり、第一は、、(1)鹿野苑でのブッダ最初の説法に活ける三法輪、すなわった。その例としてサーマンは解深密経における三法輪、すなわった。その例としてサーマンは解深密経における三法輪、すなわった。その例としてサーマンは解深密経における三法輪、すなわった。その例としてサーマンは解深密経における四諦の教え、(2)諸はみな空であるという教え、(3)不空不妙の教え、第三は解深密経の大学の教え、第三は解深密経の大学の教え、第三は解深密経の大学の教え、第二は解深密経の大学の教え、第二は解示を説言、大学の教え、第二は解示を記されば、ブッダは、同じ説法の中で、アビダルマ仏教の解釈によれば、ブッダは、同じ説法の中で、大学の大学の小乗の教え、第二は解深密経の大学の教え、第三は解深密経の大学の教え、第三は解深密経の大学の教え、第三は解深密経の大学の教え、第三は解示など、第一は、1000年によりないが、1000年によりない

であり、解深密経の教えは真実を説きあらわした完全な教えであかにしたのである。小乗の教えと般若経の教えとは不完全な教えが、それを構成する要素そのものは有ると説いている。砂若経にが、それを構成する要素そのものは有ると説いている。砂若経においては、すべてのものはその本性は空であると否定的に説くが、おいては、すべてのものはその本性は空であると否定的に説くが、おいては、すべてのものはその本性は空であると否定的に説くが、おいては、すべてのものは縁起によってなりたつと言う小乗の教えでは、すべてのものは縁起によってなりたつと言う小乗の教えでは、すべてのものは縁起によってなりたつと言う小乗の教えでは、すべてのものは縁起によってなりたつと言う

究極の真理と結びつかず、解釈が必要であるという点で不了義と 究極の真理と結びつかず、解釈が必要であるという点で不了義と という点から了義である。それに対して、世俗一般の承認してい という点から了義である。それに対して、世俗一般の承認してい という点から了義である。それに対して、世俗一般の承認してい という点から了義である。それに対して、世俗一般の承認してい という点から了義である。それに対して、世俗一般の承認してい という点から了義である。それに対して、世俗一般の承認してい をいう点から了義である。それに対して、世俗一般の承認してい をいう点から了義である。それに対して、世俗一般の承認してい をいう点から了義である。それに対して、世俗一般の承認してい をいう点から了義である。それに対して、世俗一般の承認してい という点から了義である。それに対して、世俗一般の承認してい をいう点から了義である。それに対して、世俗一般の承認してい という点から了義である。それに対して、世俗一般の承認してい という点から了義である。それに対して、世俗一般の承認してい という点から了義である。それに対して、世俗一般の承認してい という点から了義である。それに対して、世俗一般の承認してい という点から了義である。それに対して、世俗一般の承認している表面的な真理は、完全明白な言葉であらわされているけれども、

おける解釈学の問題を考察している。か、どのような意味が承認されるべきであろうか、という仏教に重要であるならば、どのようにその意味が決められるのであろう重要であるならば、どのようにその意味がその言葉や文字よりも

ら解釈方法がなされたのである。

いわれる。

次に中国仏教の解釈学を問題にする Peter N. Gregory の論文 Chinese Buddhist Hermeneutics: The Case of Hua-yen (Journal of the American Academy of Religion, LI/2) なとりあげたい。これは、すでに考察したサーマン論文に啓発されて発表した論文でれは、すでに考察したサーマン論文に啓発されて発表した論文であれば、すでに考察したサーマン論文に改善されて発表した論文である。

インドで歴史的に成立した経典や論書が、中国において経論成

のとれた教えになりうるか、ということである。きた仏教の教えが、どのようにしてお互いに調和し、一つの統一仏教に対してなげかけた解釈学的問題とは、入りまじって入ってとになり、そこに教説の体系化が必要になった。すなわち、中国立のクロノロジーとは無関係に、ほとんど同時代に研究されるこ立のクロノロジーとは無関係に、ほとんど同時代に研究されるこ

系づけ、ブッダの真の意図を明らかにしようとする教相判釈といるなけ、ブッダの真の意図を明らかにしようとする教相判釈といるない。これでは、仏教は外来の宗教であり、中国社会の中における仏教の存在は、仏教は外来の宗教であり、中国社会の中における仏教の存在は、仏教は外来の宗教であり、中国社会の中における仏教の存在は、仏教は外来の宗教であり、中国社会の中における仏教の存在は、仏教において、登るのに、異なったの経典はならなかった。そこで、中国仏教において、異なったの経典はならなかった。そこで、中国仏教において、異なったのにしようとする教相判釈といるがは、方法、順序、説かれた意味内容などによって教えを分類し体は、方法、順序、説かれた意味内容などによって教えを分類し体では、方法、順序、説かれた意味内容などによって教えを分類し体では、方法、順序、説かれた意味内容などによって教えの経典は、方法、原序、説かれた意味内容などによって教えを分類し体が、方法、順序、説かれた意味内容などによって教えを分類しない。

体系化を与える規則を見つけるための解釈学的方法である。グレ教相判釈は、莫大な、ときには互いに異なる説き方をする経典にるか、という二つの解釈学的問題が含まれている。したがって、るか、という二つの解釈学的問題が含まれている。したがって、国人のメンタリティーに対する仏教の説き方、②中国に伝えられ国人のメンタリティーに対する仏教の説き方、②中国に伝えられ

グレゴリーの華厳解釈学は、彼の他の論文 What Happened to the "Perfect Teaching"? Another Look at Hua-yen Buddhist Hermeneutics. ("Buddhist Hermeneutics" ed. by Donald S. Lopez, Jr.) において、さらに多角的な立場から論じられている。 一九八四年六月にロサンゼルスで開かれた仏教解釈学の学会における発表も、経論に見られる解釈学、注釈者や祖師の解釈方法おける発表も、経論に見られる解釈学、注釈者や祖師の解釈方法が中心になっている。

_

John C. Maraldo: A Review of Some Approaches to Hermeneutics and Historicity in the Study of Buddhism (一九八五、大谷大学真宗総合研究所、研究所記要第三号、Hermeneutics and Historicity in the Study of Buddhism, The Eastern Buddhist, New Series,

解釈学の問題にとって最も重要であるとしている。 りあげて解釈学の伝統を概観し、とくにガダマーの解釈学が仏教りあげて解釈学の伝統を概観し、とくにガダマーの解釈学が仏をとれかタイ、ハイデガー、ガダマー、リクール、フーコーなどをと見なおそうとするものである。まず、シュライエルマッハー、デタの対象が表の諸問題をSpring, 1986.)は、西洋の解釈学の観点から仏教解釈学の諸問題を

Bewußtsein(影響史の自覚)という概念は、仏教解釈学の問題に 解釈学的な状況 (Situation) を自覚する wirkungsgeschichtliches とって最も大切である われが、理解しようとするテクストの影響史に対して立っている sgeschichte(影響史)ともいっている。⑶現代の読者であるわれ ガダマーはまた、理解におけるこの地平の融合の過程をWirkung とは、われわれ自身の地平とテクストの地平とを融合するプロセ スである。それは Horizontverschmelzung(地平の融合)である。 著者との間の歴史的距離を識別しなければならない。だから理解 らない。その役割を正しく知り、それがどのように次第に変化さ れわれがもちこむ先入見(偏見)(Vorurteil)を認識しなければな 連づけようとしている。(1)テクストを理解する過程において、 ed. 1972) にもとづいて次の三点にまとめ、仏教解釈学の問題に関 Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik (Tübingen, 3rd. せられるのかを注目する。⑵われわれと過去のテクストあるいは マラルドは、ガダマーの解釈学を Wahrheit und Methode:

ところで、マラルドによれば、仏教解釈の伝統的な方法である

いての妥当性を考察すること、解釈の一般的理論を構築すること、釈学から見れば、非常に条件づきの意味においてのみ解釈学的で見れば、非常に条件づきの意味においてのみ解釈学的で釈学から見れば、非常に条件づきの意味においてのみ解釈学的で系学がら見れば、非常に条件づきの意味においてのみ解釈学的で系学がら見れば、非常に条件づきの意味においてのみ解釈学的で系学がら見れば、非常に条件づきの意味においてのみ解釈学的で表している。

が欠けている。

そこで、仏教解釈学を確立するためには、われわれが理解しよらない、とマラルドは述べている。 たとえば、道元の解釈について釈した方法をわれわれがとりあげる場合、(1)われわれが道元を解釈するために用いる方法を明らかにする、(2)道元の解釈について釈するために用いる方法を明らかにする、(2)道元の解釈について釈するためには、われわれが理解しよらない、とマラルドは述べている。

ける重要な問題提起をしている。解釈学から多くのヒントを得て、仏教解釈学を考察する場合にお解釈学から多くのヒントを得て、仏教解釈学を考察する場合におり、とくにガダマーの以上のように、マラルドは、西洋の解釈学、とくにガダマーの

gaku-kenkyūkai, June 7th, 1987.) は、過去のテクストと現在の読り組んでいる学者の一人である。彼のペーパー The Scholarly Delivered before the 38th Meeting of the Nihon Indogaku-Bukkyō-Delivered before the 38th Meeting of the 38th Meetin

「仏教研究と解釈学理論(Buddhist Studies and Hermeneutical仏教研究に適用しようと試みる点で注目に値する。その第一章は、者との間にある文化的、歴史的距離をのりこえる解釈学の方法を

Theory)」という題のもとで論じられている。

テクストの理解について、ゴメスは次のように論じている。 さらに、 な。それは、隠されたテクストを発掘し、そのベールを剝いでゆる。それは、隠されたテクストを発掘し、そのベールを剝いでゆる。それは、隠されたテクストを発掘し、そのベールを剝いでゆる。それは、隠されたテクストを発掘し、そのベールを剝いでゆる。それは、似数の研究は、解釈を事とする学問である。 ゴメスによれば、仏教の研究は、解釈を事とする学問である。

「個々の読みがそれ自体の制約を伴ったそれぞれのコンテク「個々の読みがそれ自体の制約を伴ったそれぞれのコンテクストを創り出してゆくのです。個々の読みは歴史の内で生ずストを創り出してゆくのです。個々の読みは歴史の内で生ずいる"歴史(history)"もまた、現在起こりつつあるものでいる"歴史(history)"もまた、現在起こりつつあるものでいる"歴史(history)"もまた、現在起こりつつあるものでは、「個々の読みがそれ自体の制約を伴ったそれぞれのコンテク「個々の読みがそれ自体の制約を伴ったそれぞれのコンテク

していることが明らかである。であり、ガダマーがいう影響史(Wirkungsgeschichte)を問題とわれわれへの、そしてテクストへの作用のできごととしての歴史われわれ、われわれがテクストを理解しようとするときにおこる、

「読み手はテクストが彼の地平(horizon)の彼方にあるとい

身を委ねなければならないのです。読み手が意味を形成するという)読みの弁証法を受け入れることによってテクストに 記の原則のでしょうし、私が読むにつれて、テクストも変わるでしょう。 Sutta (Sn. うことを認識しなければなりませんし、また、("私は変わる す")とは、

相互作用によって変化します。」〔Gómez p. 4〕 相互作用によって変化します。」〔Gómez p. 4〕 和って変化します。 は、読みの制約に関 来たらされることはあり得ません。意味は、読みの制約に関 来たらされることはあり得ません。意味は、読みの制約に関 来たらされることはあり得ません。意味は、読みの制約に関 ですが、だからと言ってそのまま、意味がテクストに持ち

ある。

ここにガダマーの解釈学の影響を指摘することができる。ガダマーによれば、先入見(Vorurteil)は、ものを見るための出発点であるが、それを固執すれば独断におちいる。読み手は、テクストと対話し、自ら問いを問うことによって自己の先入見が修正されなければならない。すなわち、読み手の地平とテクストの地平とを弁証法的に止揚して、テクストの中の事柄を新しい視点に立って見なおすのである。つまり、解釈とは、読み手とテクストとが、溶解した地平のなかで新たに見なおす積極的で生産的な作業が、溶解した地平のなかで新たに見なおす積極的で生産的な作業が、溶解した地平のなかで新たに見なおす積極的で生産的な作業が、溶解した地平のなかで新たに見なおす積極的で生産的な作業ない。ゴメスの言う「(ぶ私は変わるでしょう」という)読みの弁証法を受ければならないのである。ゴメスれることによってテクストに身を委ねなければならないのである。ガダ

記の原則の適用法を試みているが、紙幅の関係で省略する。Sutta (Sn. 1, 8), Madhupiṇḍika-sutta (MN 18) をとりあげ、上す。」とは、まさにこのことを意味している。次にゴメスは Metta

四

にして、われわれの仏教研究の方法論を一度反省してみる必要がの仏教学者が仏教研究の方法として試みている仏教解釈学を参考仏教研究において、方法論の問題は最も大切である。アメリカ

日本の仏教研究においては文献学と歴史学とによる研究方法が日本の仏教研究においては文献学と歴史学によって仏教を解明する学問であり、仏教文献や仏教の歴史的事態えた仏教の真理そのものについては、文献学や歴史学によって超えた仏教の真理そのものについては、文献学や歴史学によって超えた仏教の真理そのものについては、文献学や歴史学によって超えた仏教の真理そのものについては、文献学と歴史学とは、客観的、実証的な方法主流としては限界がある。そこで、それについては別の機会に考察した出る研究方法が当ないのが考えられるが、それについては別の機会に考察した仏教解釈学が考えられるが、それについては別の機会に考察した仏教解釈学が考えられるが、それについては別の機会に考察した

(ながさき・ほうじゅん、インド哲学・仏教学、大谷大学教授)